

## 植物工場の今後考える

経済産業省中部経済産業局が主催する「植物工場フォーラム 2011—東三河地域における植物工場の未来を描く—」が4日、豊橋商工会議所で開かれ、県内外から、農業関係者をはじめ新規参入を目指す企業関係者など約170人が参加。新たなビジネスチャンスをつかもうと、講演やパネルディスカッションを熱心に聞き入った。

最初に基調講演として、NPO法人イノブレックスの藤本真狩代表理事が「技術革新が進む植物工場の市場可能性と経営戦略」をテーマに、国内外の事例を紹介しながら、今後の植物工場ビジネスを展望した。



新たなビジネスモデルを提案する藤本氏

まず、植物工場の現状について、成功事例を示しながら「赤字6割、収支均衡3割、黒字は1割」と説明。黒字化までに時間がかかることを示した。

今後は「レタスなどの大規模工場は淘汰(とうた)が進む」と予測。「葉野菜から、医薬・漢方向け植物や高機能野菜にシフトしていきましょう」との見通しを語った。さらに新たなビジネスモデルとして、体験型・エンターテインメント性のある店舗併設型工場、廃校の利用、メディカルハーブの生産などの提案を行った。

その後、サイエンス・クリエイトの中野和久専務がコーディネーターとなり、パネルディスカッションに移った。イシグロ農材の石黒功社長、信州サラダガーデンの小林豊代表取締役、アグリポピュレーションジャパンの山根正義代表取締役、豊橋温室園芸農業協同組合の榎島弘光組合長に藤本氏が加わり、今後の課題や方向性について意見を交わした。会場からも発言が出るなど、あらためてこの分野への高い関心ぶりを示した。(石川正司)

▶ 貴重な「豊橋葉巻」の製造工

▶ アルミ缶抜き取りに待った

▶ 6日に「感謝デー」

▶ 豊橋で留学生意見交換会

▶ 植物工場の今後考える

▶ 猫を主人公に創作童話

▶ 郷土芸術家の四人展

記事検索



book

2011年12月13日の記事

2011年12月12日の記事

詳細検索へ

連載  
コーナー



● 東日評論

● 東三河の力

● 人に歴史あり

● タローズIB